

「行燈の中に座っていた狐」など

文学と美術のはざま

小池 正胤

「葛の葉」（安倍晴明伝説）の根付 - 「しのだづま」の浄瑠璃・歌舞伎 - 蘭菊 - 庭 - 「築山庭造傳」 - 黄表紙の挿絵の庭先 - 「馬琴日記」と庭・土御門家（安倍晴明伝説）

「葛の葉」の根付と狐（安倍晴明伝説）

ブタベスト工芸美術館は東洋美術の収集で有名である。その中でも日本美術（浮世絵・陶磁器・根付・香盒など）の点数がことに多い。この一部は「フェレンツ・ホップ東洋美術館所蔵日本美術品図録」（国際日本文化研究センター日文研叢書6）として紹介されている。しかしそこに掲載されているのがすべてではない。

未公開の一つに縦4.5cm×1.5cmほどの「行燈型」の根付がある。その障子の文字の解説を頼まれた。「恋しくはたづねきてみよ」とある。障子の一面が上下できる。

なかに白い小袖（元禄袖らしい）に女房結びの帯をきりりとしめた女、両手は揃えて膝におき、ただし狐の顔をややうつむかせて座っていた。

2cmにはならないため、模様も描けなかったのか、白無地の小袖の膝と伏し目の狐面がそれゆえに可憐悄々として、この「葛の葉狐」の極小塑像はいっそう哀れでもある。

「恋しくはたづねきてみよいずみなるしのだのもりのうらみくずのは」は改めていうまでもないほど周知の安倍晴明出生譚である。また人間と異類の報恩婚姻譚でもある。この系譜や類書については、例えば渡辺守邦氏や山下琢巳氏

の論考^①に詳しい。清明伝説にしても、「大鏡」「今昔物語」「古事談」「発心集」「宇治拾遺物語」などから近世初期の「簠簋抄」「安倍清明物語」、古浄瑠璃の「しのだづま」、竹田出雲作「蘆屋道満大内鑑」に至り、歌舞伎に改作されて^②、翌年江戸でも上演されるなど、近世期以来の演劇の代表作の一つになっている。また現代は清明伝説の小ブームであり、その名の小説や劇画が書店の棚の一隅をしめ、新刊があとをたたない。

行燈の中のこの「葛の葉狐」の小塑像も大きく長い清明伝承の一隅につつましく座っているのであった。

一九九九年一〇月から二〇〇〇年三月末まで、ブタペストのカーロリ ガスパール カルビン改革派教会大学の日本学科の客員教授として赴任していた。その前年の九八年、プラハ滞在中にブタペストを訪ねホップフェレンツ工芸美術館東洋部と工芸美術大学図書館のそれぞれに全く未調査の江戸期から明治初期の資料があわせて四百点以上あるのを寸見していたので、東洋部長Fマリア博士と図書館長 カタリン博士の承認をえて、余暇にノートをとりはじめていた。たまたま主任学芸員チェ エヴァ女史が学芸員のビンチク モニカ氏を通して解説を頼まれたのが、この根付の障子の文字だつた。つまり初めから根付を調べていて「葛の葉狐」に出会ったのではなかった。障子も何の気なしに触れたらば上がってしまった。そもそも根付にこのような小細工をしなければならぬ理由は何だろうか。

「しのだづま」の浄瑠璃・歌舞伎

ただそれだけに思いがけないこの狐の悄然とした姿には感動した。生命の恩人だけではなく、愛する夫である安倍保名、ふたりの間のいとし子安倍の童子(清明)、女房であり母でありながら異類であり、またそれゆえに禁忌を破ったものの従わねばならぬさだめ、その苦悩の悲しみの姿をこの寸に足らぬ塑像は表していると思った。

近世期に入ってこの「葛の葉」「安倍晴明誕生譚」は上記の浄瑠璃・歌舞伎によりまた子供の双六にまで描かれるほど^③に普及すること。「小袖物狂い」「保名物狂い」など、美しく悲しく哀れ、というより、「葛の葉」は艶麗・妖婉な所作事として、ひとつの美感を固定化させるようになる。これは歌舞伎「蘆屋道満大内鑑」が初代瀬川菊之丞が演じて大好評だったことが大きく、この「子別れ」を描いた浮世絵（錦絵・役者絵）も庭の籬の蘭菊にあわせて、あでやかな色彩感豊かな文様の衣装により、いっそう役者の美形と役柄を効果的に見せたのであつた。

しかしこの根付の「行燈の中に座った狐」は竹田出雲の浄瑠璃よりも、むしろ古浄瑠璃「しのだづま」の「第三」の素朴な語りの情感に近いようにも思う。

☆あゝひやゝかなりしあきのかぜ。引わづらはゝいかゞせんと、こそでを
うちきせ。まはしてむすぶさおりおびは。いとあいらしきよそほひ也。

☆ころしも今はあきのかぜ。ふくろうせうけいのえだになきつれ。きつね
らんぎくの花にかくれすむとは。

☆此女ばうていぜんのまがきのきくに思をよせしが。さきみだれるいろか
にめでながめ入。かりのすがたを打わすれあらぬかたちとへんじつゝ。
しばし。ときをぞうつしける。

冷ややかさの肌感じられる秋の夕暮れ、幼い愛し子を気遣い小袖を着せる母、自らもまた小袖をつつましく身につけ、しかし咲き乱れる籬の菊に見とれたあまり、ふと正体を見せてしまう心のすき、それはもう元に戻らない。それがうつむきかげんのこの小さな狐の表情ともつかない姿、無地の小袖の肩を落として膝においた手に痛いほど哀感が込められている。いささか感情移入に過ぎるかもしれないが、これが狐面であればこそ異類の哀れさや悲しみを表していると思った。

この「根付」の製作年代・作者とも未詳である。江戸中期以降と推定してもいいだろう。だが作者の有名無名は論外である。ここには作者某の「しのだづま」あるいは「葛の葉」にたいする思いが表現されていることは確かであり、

その結晶度はかなり高く評価してもいいのではないか。いいかえれば結晶の核には「晴明・葛の葉伝説」つまり文学があり、それが工芸品として立体化したともいうことができると思う。

文学の越境といえはやや固い表現になるが、工芸品の価値を成立させる要素の大きな一つに文学が存在していることは確かである。

このようなことはいろいろな面にいえるのではないか。あるいは今後もっとその複合的・重層的な意味を認めていくべきだと思う。例をあげればきりがなが、文学的素材が、香盒の蓋の蒔絵、印籠の絵、什器の絵付けなどに再表現された対象は広い。当然の事だろうが、ここに文学－絵画－工芸品が一連の芸術的空間として、日本の美的世界を構成していることを改め考えさせるのである。

最近このように従来の文学的範疇を拡大して考えることがさかんに行われるようになった。私はブタペストで必ずしも最初からこのテーマを考えて調べ始めたのではなく、たまたまブタペストの未調査の和書関係を調べながら、行き当たったことであった。

蘭菊・庭・「築山庭造傳」

いま素材といったがその最小単位は詞である。この狐は狐－蘭菊とつながる。そこでさらに「俳諧類船集」などから縁語をたどると以下ようになる。

狐－蘭菊－菊－籬－庭

それゆえ「葛の葉」から「籬」と「庭」を連想することは容易だろう。

工芸美術館の和書や諸資料のなかに「築山庭造傳 後編」があった。(三卷三冊・庭園・秋里籬島著・文政十一年(1828)・跋文 文政元年(1818))

享保二〇年にも同名本(別名「築山山水庭造傳」)が出されており、本書はこれに倣ったものである。しかし先行書は挿絵版行ともかなり粗雑であり、本書はことに挿絵の細緻な写実性では先行書とは比較にならない。(さらに本

書は明治二九年に再編集刊行され、重ねて昭和二三年に京都芸艸堂から刊行されている)

著者の秋里籬島は文政末年まで生きた近世中期の読本・名所図絵作者でまた作庭家としても一派をなしていたらしい。本書は当時の作庭全般にわたって記述されており、中巻がことに詳しい。

中巻 (三五丁) 小庭造方之事 殿中庭之全図 駿州大邦氏庭全図 路地掛り庭之全図 同路地庭造り方之事 庭造諸道具之事 定式手水鉢置様之事 棗方定式之全図 中括之庭之全図 業体ニ随庭造り様 市中之庭造方之事 本路地造之庭之全図 草木取扱様心得事 手水鉢置様之事 蹲踞手水鉢之事 橋杭定式之全図 手水鉢前定式置様之傳 (以下目録と内容が異なる) 石灯笼濫觴之事 浪華島裡田中某之陰栖花月庵玉川庭之図 大書院庭飭手水鉢之全図 台石手水鉢置様之全図-内水屋之図 釣手桶手水鉢 (以下手水鉢一六図) 宝珠形之灯笼 茶庭定式蹲踞之居方 定式之下水瓶之置方 湧玉形置様之図 笕之手水鉢之図 石造神初テ石灯笼造給図 庭建石灯笼之雛形 (一九種)

手水鉢・燈籠・籬 (袖垣) の類がとくに詳述図示され、さながら造園辞典の

便利さである。



図1

この中巻一丁オモテの挿絵は櫻をつけた冠に狩衣姿の男が縁にすわり庭を眺めている図絵である。詞書きは「庭の草も心あるさまにすのこすいかひの……」と徒然草の一文をひき「つれへの文は吉田兼好の隨筆にして庭中の粧ひものさびて年ふりたるさまを自然に造りたるもまた一しほふるめかしからすその気しきの雲上なるをいふその心をとりにて庭中のよそほひをつくるべし」

(図1 都立中央図書館加賀文庫蔵)

縁先の庭造りの様子や心を「徒然草」の風流美に重ねてまず説くところにこの書の性格が思われる。

本書自身によって、この挿絵を解説すれば、縁先、簀の子の前には「東形手水鉢」と臺石と清浄石がおかれている。袖垣はたぶん「茶筌菱袖垣」だろう。ほどよい高さの松を覗かせ、左の植え込みと火燈石に湯谷形燈籠だろうか。安定した配置とっていいだろう。

このように縁側、濡れ縁（簀の子）の先の前栽の構成に必要な物、手水鉢、臺石、水擲石、燈籠、踏み石の種類や置き具合、各種袖垣、各種燈籠などは作庭にきわめて重要な素材であり、本書ではそれぞれが克明に説明図示されている。これだけ眺めていても、日本庭園の個性と文学とのかかわりが思われるのである。

なぜ前栽がこのように多様化したのか。あるいは庭造りの場合にこれを重視したのか。

あらためてこの図をみると近世後期には類似の絵柄の多いことに気づく。

たとえば鈴木春信画の「縁先美人」「縁先物語」「ささやき」「瀬川菊之丞のうめかへ」などと名づけられた有名な錦絵である。

それぞれに縁先は共通し、司馬温公形手水鉢・高麗袖垣・宇和形燈籠・萩・菊・羊歯・万年青などが添えられる。なかでも袖垣と手水鉢はこれらの人物をおいた縁先を描く類の三点セットとして基本的な構図ともなっている。蘭菊に見入る「葛の葉」の狐はこのような構図のなかにおいてもきわめて自然におさまるのではないか。

黄表紙の挿絵の庭先

こうした構図は黄表紙の挿絵のなかにも多くみられる。

北尾政演（山東京伝）の出世作「手前勝手 御存商売物」天明二年（1782）三ウ四オは、柱隠しに見立てた娘が青本（黄表紙）に見立てた粋な男に思いのたけをうちあげ、庭先の手水鉢に小指をあてて詰めようと刀を振りあげる場面

で、春信にもある「ひらがな盛衰記-うめがへの手水鉢」に見立てた構図でもある。(図2)

黄表紙の挿絵も文学の一部とすれば、演劇-錦絵-(庭造)-黄表紙の連鎖的利用ということになる。「越境する画像」というセッションの主題からいえば越境を繰り返しながら、国境線が二重三重に擦りこまれているとも言えようか。

京伝は初期に作者画工をかねていたが、同じような恋川春町画作の「三幅対紫曾我」安永七年(1778)の一四ウ-五オにも筆遣いはやや粗いが、畠山重忠(松平南海)の館の縁先が描かれる。ここには有楽形あるいは累石形であろう燈籠と鶯箆形の籬、燈籠の下には心體石が置かれている。いささか思いこみにすぎるかもしれないが、南海は洒脱数寄者としても有名であったので、春町はあてこみの人物にあわせて風流な燈籠と籬を描いたのかもしれない。(図3)



図2

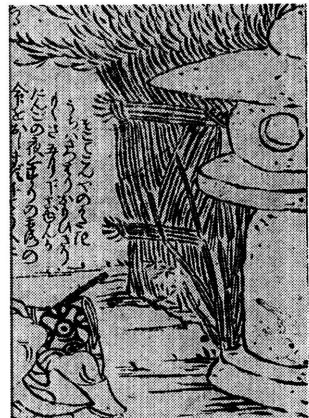


図3

このような縁先の構図を曲亭馬琴の黄表紙から四種だした。いささか恣意的ではあるが馬琴を選んだのは「馬琴日記」によってそれを私生活と関連づけるためである。



図 4

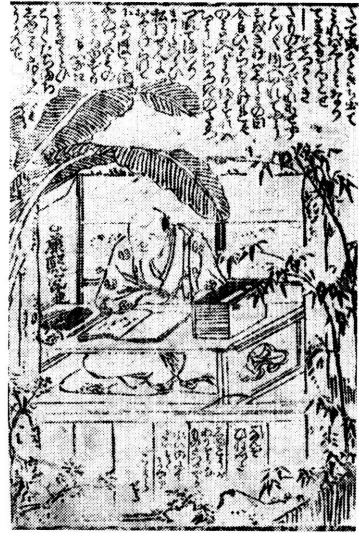


図 5



図 6



図 7

「四編摺心学草紙」北尾重政画寛政八年（1796）刊一〇オ。京伝の「大極上請合売 心学早染草」（北尾政美画 寛政二年刊）の主題を複雑にした作品だが、この場面は金持ちの道楽息子が千両箱を金蔵から盗み出すところである。千両箱をわざわざ人目につく縁先から持ち出すはずもないのだが、家の内外を示す構図としてすでに類型化していたのだろうか。手水鉢は袖垣に隠れて見えないが濡れ縁もある。（図4）

「敵討蚤取眼」同画享和元年（1801）刊。馬琴の黄表紙のなかでも風刺的ユーモアのきいたおもしろい作品だが、この冒頭一ウ二オは蚤と虱が馬琴の書斎を訪ねる場面を描いている。ここには手水鉢や燈籠はないが、二オに窓辺の文机で執筆する馬琴をなかに芭蕉と笹竹を置きその外を草建仁寺垣で囲んでいる。窓下の地面には心體石のようなものが描かれているが、架蔵本では定かではない。これはさきの三点セットの構図ではないが、さりとして当時の馬琴の書斎の写実でもないだろう。しかし戯作者として漸く名をあげかけた馬琴が机辺内外をどのように考えていたのか想像できるだろう。（図5）

「六冊懸徳用草紙」同画享和二年刊四ウ五オ。一オの序文も上下二分して文体も変え、本文は一場面の挿絵に上段は連続した敵討の話を書き、下段は挿絵に合わせた読み切りの小咄を書き入れる、馬琴らしい理屈めいた工夫のある作品である。ここは主人公源五兵衛の弟が母の病氣回復後庭に水をうつ様子が描かれる。弟の視線は右半丁の姉と恋人が障子の陰で眼を見交わす姿に向いている。この弟は詞書にはなにも書かれない。しかし庭に手桶から水をまく弟の図はこの家と家族関係を示しているし、また後の「馬琴日記」にもかわりがあるのでだしてみた。（図6）

「小夜中山宵啼碑」歌川豊広画文化元年（1804）刊二ウ。主人公の女房に従兄弟が横恋慕をして口説くといういささかけしからぬ場面である。ここも室内から見た縁先であるが、橋杭形の手水鉢の後ろに植え込みと鶯箱垣、定石が置かれ、主人公の先祖が筋目正しく、今は時の執権北条貞時に仕える侍であることをこの庭のようすからも示している。（図7）

このように画面の中に、「築山庭造傳」に示すようなやや定型的な庭の構図を垣間見せることの意味を考えてみられないだろうか。

一九九九年一〇月、今橋理子氏の「江戸絵画と文学－描写と言葉に文化史」で、庭園の絵画化の意味が説かれ、多くの示唆を受けた。しかもこれら黄表紙刊行当時はあたかも松平定信が「浴恩園」を造りその景観を描かせた時期でもある。しかし造園書との関係までには及ばなかったようだ。

私はここで造園書と文学あるいは絵画を含めての文化をも考えていいのではないかと思う。

「馬琴日記」と庭・土御門家（安倍晴明伝説）

黄表紙の挿絵の中では馬琴はあのように庭にむきあっていたが、実生活ではどうだったか。公刊されている日記の文政九年は、毎月の現存が少ないが、十一月二四日には庭のことが記される。

廿四日

一朝四時過、植木屋金次来る。申付置候うゑ木持参榎也。右うゑつけ、その外、大榎・山茶花・中梨子・中豊後梅・小梨等うゑかへ、向山さうち等にて、終日也。

この年はこれのみだが、以後の庭の記述は多く、出入りの植木屋金次（治）か馬琴自身が手入れに励んでいる。この「向山」は以後もでてくるので、まさに庭の片隅には築山があったと考えていいだろう。とすればこれに応ずる縁先の様子も想像できよう。

庭の記述は、文政十年正月廿二日、廿三日、二月廿一日と続くが、以下目立つところを抜いてみる。

文政十年二月廿四日

今朝より、宗伯・予兩人にて、庭の花壇鋤かへし、こやし入、菊・桔梗・其外うへ替。東中口戸袋の陰、右同断土ふるひ、三尺ニ忒尺餘、花壇に作る。藤袴・われもかう・女郎花・野菊・鋸草等、せいたかき分うへつけ等、

終日也。

すでにこの年三十歳になっている長男宗伯に一日中手伝わせて、秋草の植えつけをやっている。馬琴がことさらに熱心だったようにも思えるが、多く言われるように庭いじり花卉鑑賞、ガーデニングといいかえればいいか、は町人にとっては生活の一部でもあったようだ。

この三日後の廿七日は次ぎの記述となる。

一予ハ、今朝ハ、玄関脇ニ有之候合歎実生へ五六本植かえ、山牛蒡、并ニ北の庭の柳さし木うへかえ、東山の小松・もみぢうへかへ、東の縁のしたニ入置候土のふるひ屑、表へ出し、右門脇低き処へならし、魚こやし両菜園へ掛之、水汲あげ、此節かハき候木の根へ、宗伯と共に掛之。薄暮ニ及び、大抵しをハる。

二月の終わり、今日の五月の初旬は日も長い。朝から薄暮まではほ一〇時間近く「庭造-秋の草木」の下ごしらえに馬琴父子は精をだす。これは黄表紙の前髪姿の弟が庭木に水をやる以上の庭の手入れであった。

ところが同年三月十日にはまた次ぎの記述がある。

一昼九時過より、宗伯同道にて出宅、麴町山王へ参詣、夫より、土御門頭陰陽頭殿旅館へ罷越、浅野正親・吉田筑前へ対面。且又、土御門家雑掌面々へも対面。夫より、土御門殿御逢被成、格別間、酒被下之、夕方退散。帰路渡辺登・田口久吾方へも立寄。(後略)

これは庭には関係はない。しかし冒頭の「葛の葉-安倍晴明伝説」の安倍陰陽師家が出てくるのである。土御門家は安倍晴明から数えて二十一代目の泰重から土御門と倉橋に分かれる。このときはその土御門家十一代目晴親ではないか。晴明から数えれば三十一代目ということになる。土御門の当主が江戸へ下り、赤坂山王神社の地内に泊まっている。馬琴は宗伯と共にここを訪ねる。まず、用人頭か公家侍であろうか、私は当時の公家の家中の位階を明らかにしないが、兩人に挨拶する。下働きの者たちにまで挨拶し、やがて土御門当主に対

面し、酒をふるまわれる。三月ゆえかなり日が長い夕方辞去してその道筋で渡辺登（崑山）にも会っている。

これ以前の日記に土御門の名はないが、以後しばしば土御門はでてくるので、この日が初会ではないだろう。というのはこの二日後の十二日、土御門家来松井鑑太が馬琴宅に来て、京角鹿清蔵紹介書状と浅野正親の手簡を持ち、

土御門殿御所望のよし二付、八犬伝六編校本六冊、傾城水滸伝三編稿本八冊貸進、右鑑太ニ渡之（後略）

とあるからだ。馬琴と土御門家との間にはこのような交渉があった。さらに翌々日十四日。

一今朝、浅野正親子息某、土御門家御使として来ル。予并ニ宗伯、対面。所要ハ、一昨日貸進の八犬伝六編稿本六冊并ニ傾城水滸伝三編稿本八冊、被返之。且、水滸伝稿本ハ甚御懇望のよし、一冊たり共もらひ受け、珍藏被成度よし被申候ニ付、無抛任貴意、八冊不残進上可仕旨申之、浅野氏にわたし遣ス。（後略）

このほか「兎園小説」など五種、これは貸与だが、子息某に渡している。これらをもってしても土御門家との交渉の浅からぬこと、また馬琴小説著作のファンが堂上周辺にもいたことがわかるのである。

馬琴は翌々十六日にも土御門家にでかけていく。

一早昼飯にて、宗伯出宅。かねて申付候通り、かゞ町ミのや甚三郎方へ、八犬伝六編未売出候へども、壺部所望いたし、ミの甚下男にもたせ、山王社地土御門家旅宿へ罷越、右之本進上。陰陽頭殿へ見参いたし、饗応に預かり、帰路（後略）

解説するまでもないかもしれない。八犬伝六編の売出し前に版元にいき、一部もらって土御門殿に献上している。これに土御門家では馳走して礼を尽している。

このときの馬琴は八犬伝の人気も絶頂であり、天下の大戯作者であった。しかし所詮市井の一町人である。土御門家は平安初期からの陰陽道を司る名家中

の名家である。両者の距離は考えるまでもなく遠い。しかし著者と読者の関係から目の前にいる。著書の貸し借りの間柄でもある。馬琴も土御門家も「葛の葉」伝説を知らぬはずはない。おどけたいいかたをすれば、狐が両者を引き寄せたとでもいおうか。

ところで馬琴の庭いじりは続いている。この三月十六日には土御門殿へ出かける前に、「朝がほ并二なでしこたね・そてつ菜等」をそれぞれ池のふち、山ぶきのまへ、菜園北の垣際などにまいている。

この月晦日には庭の東方に植えてある青軸梅・紅梅の虫取りをし、つりがね草が別のところに芽をだしたので花壇に植え替えている。

こえて五月廿七日には廿一日の大風でひかえ綱が切れた梅二本、りんご一本、木刻（木斛か）、柿二本の綱をからげ巻直すことを六十歳の馬琴が一人でやっている。

この働きすぎのためでもないだろうが、この前後から彼は眼の不調をうったえ、閏六月十七日になると霍乱で寝込んでしまう。治ったのは八月末、中秋のころであった。早速庭仕事を再開する。

九月六日

一薄暮、植木屋金治郎来ル。当月節句前後、植木植替・松手入等之事、被仰付置候ニ依而、来ル十日比より罷出候而は如何（後略）

このあたりは宗伯が代筆しているのだろう。馬琴は植木屋の手配を息子を通して指図している。そこで十八・十九・廿、廿一・廿二日と植木屋がやってくる。

西境の建仁寺垣をとりつけ、中門の内垣を直し、表庭の黒松一本、東の門の黒松一本、赤松二本、池の端の小松三本の手入れをし、さらに池の端の小松四本、五葉松二本の手入れ、池のむこうの山の掃除、納戸の庭浄水前甕をすえ、水抜を拵え、小梅二本と棕櫚を植え替え、柳には竹を添え、芝を刈り、地境から東に伸びた木の枝葉芥などを埋めて、ようやく正月前、冬を控えての庭の手入れが終わった。

文政十一年正月廿八日

一八時過、京都土御門殿為使者、浅野正親来ル。家君御対面。年始祝儀・時候為見舞、掌笈扇、被賜之。其後雑談、帰去。

土御門からは正月の挨拶に来る昵懇の間柄であった。土御門殿はまた四月に江戸へ下ってきたようで、四月九日宗伯は山王神社参詣のついでに、進物を携えて挨拶によっている。

ところが、宗伯はこの年の六月下旬から病臥してしまう。体調ははかばかしくなく馬琴は心を痛める。

(六月) 廿三日

一庭のゆりの花切り、筒花いけニ立之。宗伯慰の為也。

このほかに桔梗や虎の尾なども宗伯の病床に飾ってせめてもの慰みとしている。馬琴の心中思いやるべきだし、庭の花をはさんでの親子の対応の記述はその簡明さがかえって感傷をそそるのである。これもまた庭と家族生活の一面を見せる一つの文学的場面といえるだろう。宗伯の病は九月にややおさまるが、

十月晦日、庭の丁子・花さふらん等え霜よけいたしかけ候処、日に打たれ、眼いたみ候よしにて不果（後略）

という情けない有様だった。

さてこの年十一月七日屋代次郎という青年が馬琴を訪ねてきた。

一暮方、屋代次郎どの入来。水滸伝七編上帙二部・殺生石後編上下二帙、所望ニ付、遣之。委細別帳ニとめ有之。同人著述の花壇抄、被惠之。其後帰去。

この次郎通賢の祖父は屋代弘賢（1758-1841）、幕臣、国学者で文人、「群書類従」の編纂者の一人で、馬琴との交誼も深かった。通賢はこのとき十八歳か十九歳だろう。馬琴に贈るいわゆる「通賢花壇抄」と題された処女作四三丁ほどの中本の冒頭には弘賢が序文を寄せている。

内容はあわせて三〇種ほどの花卉草木を挙げ、土質・肥料などを記して、それぞれの養生の説明を簡明にところどころ挟んでいる。ことに梅・牡丹・芍

葉・万年青・菊・躑躅・椿・山茶花・紅葉などは異種を細かくあげている。もちろん他書によったところが多いと思う一見若書の本であるが、それだけにこの青年の趣味の深さが思える。

序文で弘賢は、兄の弘清は武士（もののふ）の道に励むが、この「通賢はおこたりがち」だとなげいてはいるものの、それはかえって近世後期に生きる読書家で知識青年のはほえましい生き方でもあったように思う。祖父弘賢の縁もあろうが馬琴はおそらく息子宗伯のことも思いあわせながら、好意的にこの若者を迎えたのであろう。

「葛の葉の狐」は庭の蘭菊に見いり、それはやがて庭先の定型的な構図の中に描かれるようになる。挿絵におよび、また根付の行燈の中にも座り、かえって市井人の庭や花いじりにひろがり、彼らの交友をとおしてまた花と文学に戻っていく。

これらを越境する画像ととらえるかどうかは今後の議論に待たねばならないだろう。しかし文字言語によるのみの狭義な文学をもってするだけでは、すくなくともこれからの広く多様な文化的国境を越える理解は難しいのではないかと私は思っている。

〔注〕

- ①渡辺守邦「晴明伝承の展開－『安倍晴明物語』を軸として－」（『国語と国文学』昭五六・一一）
山下琢巳「安倍晴明一代記」（解題・解説）（『江戸の絵本』Ⅲ 昭六三・三）
- ②「歌舞伎年表」によれば、享保二十年四月「蘆屋道満大内鑑」は京富十郎座で「葛の葉」富沢門太郎。九月 大阪 十蔵座 「葛の葉」芳沢あやめ。元文二年三月 「大内鑑信田妻」江戸 中村座 瀬川菊之丞 盆「信田妻」同 同。九月「蘆屋道満大内鑑」同 同。とある。
- ③加藤康子「絵双六と読み物」『浮世絵に見る江戸の子どもたち』（平成一二・一一 小学館）

〔付記〕

「築山庭造傳 後編」は都立中央図書館加賀文庫蔵本によりました。記して謝意を表します。